スコア化社会におけるアルゴリズム批判について

拓殖大学　塚越健司

1　目的

本報告は近年の経験的データ分析によって発展が著しいスコア化技術が抱える問題を提起し、この技術への否定的議論が十分な有効性を持ち得るとは言い難い中で、どのような理論的視座を見出しえるかについて考察することを目的とする。

2　方法

諸個人の行為履歴等のデータから社会における個人のランク付けを可能にするスコア化技術は、人工知能を用いた企業等のアルゴリズム技術発展を背景に社会に普及しつつある。スコア化の潮流は、クレジットカードの信用情報、あるいは学歴といったこれまでの「スコア」の領域を越え、社会生活の隅々に反映されはじめている。例えば中国においては、買い物だけでなく、交友関係や社会的身分を含めて個人がスコア化され、それにより社会生活の利便性を向上させる。

Citron&Frank はスコア化によって一度の躓きが負のスパイラルを生じさせるような、やり直しのきかない社会の危険性について提起し、この状況を回避するための方法論について、第三者機関によるアルゴリズムの監視強化を主張する。本報告はこうした問題を踏まえ、スコア化そのものを悪とするのではなく、むしろどのようなスコア化なら許されるか、を問う議論として主に Citron&Fran を読み解く。

3　結果と結論

アルゴリズムの透明性を保つために第三者機関による監視は必要不可欠であるが、一方でスコア化の基準であるアルゴリズムを公開することが新たな問題を発生させる。Citron&Fran が懸念するように、スコアリングアルゴリズムを公開するとなれば、むしろ人々は積極的にアルゴリズムに従い、己のスコア向上「ゲーム」に参入する可能性が指摘し得る。また現に存在するスコアリングアルゴリズムをすべて取りやめることは困難であるばかりか、むしろスコア化とスコア化社会が諸個人の負担免除システムとして生じている側面も確認できる。故にスコアを否定し人間本性を擁護する立場もまた、スコア化社会の反論として十分には機能していない。

スコア化社会への批判は十分なものではなく、さらに認知科学等の分野において議論される人間の脆弱性を踏まえれば、スコア化社会のすべてではなく、どのようなスコアリングシステムを構築することが、今後の社会構築にとって有益であるかを議論することが求められる。大規模なデータ分析から生じたスコア化という現象に対して、スコア化による負担免除および脆弱性の克服といった否定することなく現実の社会と調和させるための理論が求められており、本発表性はその重要性を議論する。

文献

Citron, Danielle Keats and Pasquale, Frank A.,2014, *The Scored Society: Due Process for Automated Predictions*. Washington Law Review, Vol. 89, 2014, p.1-33; U of Maryland Legal Studies Research Paper No. 2014-8.